

三五 放牛図絵馬 一面 高砂市指定

縦一五九・五 横二二三・五(内寸縦一三六・〇 横一九〇・〇)

明治時代 明治四〇年(一九〇七)

曾根天満宮 高砂市曾根町

明治時代を代表する日本画家である橋本閑雪が描いた大型の絵馬で、牛の姿を力強く描いている。梅の花の中、綱をひきずって逃げ出す黒牛を画面いっぱい描き、その蹴出す土煙を金砂子で表現しているように見える。その牛の眼は、猛々しいというよりは優しさに満ちており、華やかな画面と黒牛とが調和した感がある。

橋本閑雪(一八八三〜一九四五)は、明石藩の元儒者で画家でもあった橋本海関の子として矢田郡坂本村(現在の神戸市内)に生れた。幼い頃より絵を好み、はじめ四条派の片岡公曠につき、一時は竹内栖鳳にも師事した。若くして神戸画壇で活躍した閑雪は、明治四一年(一九〇八)の第二回文展初入選をして以後、しだいに京都画壇の中心的存在となる。

閑雪は、青年期の明治三二年(一八九九)からしばらくの間、父海関の事情により尾上村(現在の加古川市尾上町)で隠棲生活を送っており、当地域には若き頃の閑雪の作品を稀に見ることが出来る。この絵馬は、外枠に「奉献/明治四十丁未季春二月念五日/奉献者氏名 いろは順 井内中正 伊藤喜十郎 濱本挺治 濱野竹蔵 西澤新太郎 大門歌蔵 紙谷七三郎 紙谷榮松 梶野弥八郎 中谷與八 中谷菊太郎 名高善吉郎 魚橋宗吉 網干甚八 三木寅之助 鹿間長市郎 平山卓也 森清十郎」、裏書に「明治四十年星次強團協洽二月 揮毫寄附 橋本閑雪画伯 發起人播州印南郡曾根村 梶野弥八郎 全平山卓也」という記載があり、明治四〇年(一九〇七)二月五日に、在地の一八名によって曾根天満宮に奉納されたことが知られている。この図は、閑雪が二五歳当時に描かれたもので、晩年には動物画を中心に傑出した作品を多数残す、閑雪の優れた力量がわかる。

三六 祭礼絵巻 一卷 加古川市指定

紙本着色 縦二七・五 横九八〇・〇

江戸時代 文政三年(一一八二〇)

神吉八幡神社 加古川市西神吉町

神吉八幡神社の江戸時代の祭礼行列のようすが、鮮やかな色彩で詳細に描かれ

ている。シデ振り、御先太鼓、猿田彦に先導され、馬上の小頭人と大頭人を中心としたふたつの集団が続き、総勢約二六〇人の行列となっている。この行列は、当社妙見宮(神吉八幡神社)から御旅所と思われる鳥居まで続いている。また、華やかに彩色された母衣花(ホロ花)、衣裳や持物も細かく描かれ、祭礼行列に参加する当時の人々の姿が、いきいきと描かれている。画面中には、行列の名称も付され、当時の祭礼行列のようすが極めてよく理解でき、民俗資料としてたいへん重要なものである。

裏書に「庚文政参辰葉月中旬寫 奇泉斎春腕畫」とあるが、春腕については不明である。同神社には、褪色が激しい成田廣州筆の板絵祭礼図が現存しており、筆法は異なるものの、本図と内容は一致する。

同神社の現在の祭礼は当時と比べ簡略化されているが、この絵巻が確認されたことにより、内容の一部が復活されつつある。

三七 報恩寺文書 一卷 兵庫県指定

紙本墨書

「赤松円心副状」 縦三一・六 横五二・五

「赤松則祐副状」 縦三一・三 横四九・六

「赤松義則副状」 縦三一・〇 横四七・〇

南北朝時代 一四世紀

報恩寺 加古川市平荘町

報恩寺には、「御院宣並御経」と題した卷子一卷に、鎌倉時代末期から室町時代の古文書が収められており、「報恩寺文書」として兵庫県の指定を受けている。これらの書状は、足利将軍が下した寺領安堵(寺領支配権の確認や承認)の御教書に副えて、播磨国守護である歴代赤松惣領家(範資と満祐を除く)が、報恩寺長老に送った副状や、赤松政則以後の守護直接の寺領安堵状が多く含まれる。これらの

文書は、南北朝時代の報恩寺と支配者層との関係を示しており、たいへん興味深い。その中でも、中世播磨の動乱期に台頭し活躍した円心、則祐、義則の副状を紹介する。

西播磨を中心に台頭しはじめた播磨の悪党赤松氏は、円心(則村)のとき、元弘三年(一一三三三)、護良親王の令旨をうけて皆縄城(上郡町)に挙兵した。そ